

アブラハム物語の構造 I

水 野 隆 一

はじめに

創世記に記されるアブラハムについての多くの逸話は、「逸話群」「集成」（独：Sagenkranz、英：cycle）と通常呼ばれている。一方、「物語」（英：narrative, story）と呼ばれる場合もある。これらの呼び方において、既に、それぞれの見解が示されている。

「逸話群」「集成」という呼び方には、時間的・地理的起源を異にするエピソードが、何者かによってまとめられたものという、生成についての理解が示されている。さらには、それぞれの逸話は相互にあまり関連がなく、系図と旅程表によって「緩やかに」結び合わされている、従って、一貫性、統一性に欠ける、ということが暗に含まれている。この呼び方の背後には、主に、資料批判や様式史といった、用語・文体、逸話の発生に関する理論がある。言い換えれば、この呼び方は一つの理論、通時的な観点と結びついているのである。

一方、「物語」と呼ぶ場合、そこには、一連の逸話を一まとまりの、一貫性や統一性が見いだせるものとする見解が示されている。そこにはモチーフや言葉遣い、登場人物などという共通した要素が認められるとするのである。そして、この呼び方の背後には、正典としてのテキスト理解や、所与のテキストを文学として理解する文芸批判といういくつかの前理解がある。⁽¹⁾ 「物語」という呼び方の場合も、共通時観点という一つの理論と結びついている。

通時的な理解と共時的な理解は、必ずしも相容れないものではない。文芸批判は現在のテキストを対象とするため、そのテキストの前史についてはあまり

アブラハム物語の構造 Ⅰ

関心を払うことはないが、生成、伝承、編集という歴史を否定することもない。ただ、「逸話群」と読んでしまった場合、現在のテキストがどのように構成され、従って、どのように意味を生み出しているかということについて注意が向けられなくなる危険性に対して、問題を提起しているのである。

通時的研究の本来の目的は、現在のテキストがどのようにして生み出され、伝えられ、まとめられてきたかを明らかにすること、言い換えれば、現在のテキストの「より多面的な」理解であった。その際あくまでも、「現在のテキスト」が興味の対象であったはずである。しかし、研究の現状はそうではない。各々の「資料」の意図・動機、「生活の座」の探究などが主な関心となっている。

別の問題もある。資料批判や様式史がテキストを読む際の基本的な手段となってしまったために、殊にアブラハムの逸話が記されてある、創世記11：27～25：18⁽²⁾を読む際に、そのような方法を見捨てることは「批判的な」読みでないと考えられる。⁽³⁾ しかし、本当にそのような分割、再編成が必要なのか、そうする方が現在のテキストを無理なく説明できるのか、という反省は、通時的研究の前提を受け入れての範囲内では行われても⁽⁴⁾、その前提そのものを問い直す形では行われてこなかった。

しかし、通時的研究の前提を、その有効性を確認するためにも、まずテキストの精密な読み（close reading）が必要となる。現在のテキストが、現在のままで理解でき、そこに一貫性や統一性が認められるならば、少なくとも、通時的研究では見過ごされがちな「編集者」の「著者としての性格」について、再考しなければならないだろう。⁽⁵⁾

本論文では、アブラハムに関する記事を「物語」として読むことを可能にしている「構造」を探ってゆく。それは、次のような疑問に対する解答を求めようとする試みである。「アブラハム物語」はどのような物語か。どこに記されているのか。そこではどんな意味作用が行われているのか。

ここで注意しなければならないことがある。それは、「構造」という語の用法についてである。この語は、様々な研究において用いられ、異なる用いられ

方をしてきた。共時的な研究の最初の流行である構造主義においても、「表層構造」と「深層構造」が区別され、殊に「深層構造」については、難解な図を用いて示されていた。意味論の研究者それぞれが、各々の理解に基づく構造化を図り、その結果、同じ言葉が使われていても、異なる意味が与えられていた。

本論文では、意味の多重性ということが前提とされている。テキストの一つのレベルを分析することで、テキストを理解したということとはできないと考える。従って、様々なレベルにおいて、「構造」を求めることになるだろう。その際、出発点となるのは、現在のテキストにおいて他にない。これは変わらない原則である。従って、まず、現在のアブラハム物語の本文が、その所記が対象となる。構造主義の古い表現を借りれば、その「表層構造」が分析の第一の対象となる。所記の分析が提起した問題が、その次のレベルへと導いてゆくであろう。

1. アブラハム物語の「表層構造」

この種の研究で発表されているものは多くない。Rendsburg によるものが、創世記全体を編集という観点から構造化しようとしている、殆ど唯一の作品である。⁽⁶⁾ Rendsburg は創世記を原始史、アブラハム逸話群、ヤコブ逸話群、結合部、ヨセフ物語の部分に分け、それぞれに、並行、あるいはキアスムスという構造化が見られるとしている。⁽⁷⁾

アブラハム逸話群については、27～52ページを割いて構造の提示、構造化の根拠を示している。しかし、そこにはいくつかの問題がある。

第1に、構造化の指標を限定していることである。Rendsburg は、彼自身が引用しているとおり、Cassuto の発案に基づいて、構造を提示しようとしている。そして Cassuto は明らかに、ユダヤ教の伝統に基づいてテキストを分析しようとしており、その際、指標となるのは10の「テスト」であると考えている。⁽⁸⁾ ((1)12: 1～3、出発；(2)12: 10以下、エジプトでの「危険」；(3)13章、ロトと別れ；(4)14章、ロトの救出；(5)16章、ハガルの物語；(6)17章、割礼；(7)18: 22以下、「執り成し」；(8)20章、ゲラルでの「危険」；(9)21: 9以

アブラハム物語の構造 Ⅰ

下、ハガルの物語；(10)22章、「アケーダー」）。

ところが、このままでは完全なキアスムスとして図式化することができず、引用されている文章の中で Cassuto も、(2)(3)をひとまとめにし、これが(8)(9)のまとまりと対応しているとしている。そのため Rendsburg は、5対5ではなく、4対4のキアスムスを示している。⁽⁹⁾

この際の指標となっている「テスト」が問題である。この語 **תּוּס** は22：1に一度用いられているだけであり、他の箇所は、その可能性はあり得るとしても、解釈されて「テスト」だとされているのである。従って、テキストそのものが「テスト」を主題として構成されていることを、テキストそのものから言うことはできない。

第2の問題は、アブラハム逸話群の範囲を11：27～22：24としていることである。Rendsburg は23：1～25：18を上挙げた「結合部」の前半部分とし、従って、アブラハム逸話群に属さないとしている。⁽¹⁰⁾

これは、第1の問題とも関連するが、22章をアブラハム逸話群の「クライマックス」と考えるところから来ている。しかし、そのような読みに対しては、close reading から疑問を呈することができる。これは、民族／宗教上政治的な要請に基づく読みである、と。⁽¹¹⁾

さらに、Rendsburg の言う「結合部」には、後半部分があり、35：23～36：43がこれに当たる。⁽¹²⁾ しかし、この2つの部分は、完全には対応していない。

「サラの死と埋葬」に対応する部分は欠けているし、要素の配置も、キアスムスでも並行法でもない。ところが、この「不完全さ」は説明可能だとしている。⁽¹³⁾ それでは、ここまで編集者の手腕を構造化に見ていた観点を放棄してしまうことになり、自身の研究全体の前提を自ら否定してしまうことになる。

第3に、(2)(3)と(8)(9)の対応に関して、さらに3つの小区分をしているが、これが(2)(3)の a b c に対し、(8)(9)では a' c' b' となっているとしている。⁽¹⁴⁾ これも、自ら立てた原則に反している。

これらの問題すべてが、Cassuto の発案を無批判に受け入れたことから出発している。その枠組みを正当化し、そこからはみ出る部分に別の説明を見出

そうとしたが故に、自己矛盾を引き起こしていると言ってよいだろう。

従って、まずテキストそのもののの中に、それもできるだけ解釈とは関係のないレベルから、構造化を可能にする要素を見出すことを、この節では試みる。

1.1. 繰り返しに基づく区分の可能性

アブラハム物語の「表層構造」を一見したところ、あるフレーズが2度用いられていることに気付く。一つは **אַחֲרֵי הַדְּבָרִים הָאֵלֶּה**（「これらのことの後」、15：1、22：1）、もう一つは、**לֵךְ-לָךְ**（「行け」、12：1、22：2）である。

「これらのこと後」は通常「編集句」と考えられているフレーズである。しかし、いわゆる資料批判の結果と重ね合わせると、単純に「編集句」としただけでは、このフレーズの役割を説明できなくなる。

14章には、古い戦争の記録（「記憶」？）が記されてあった。その伝承の元となった事件、伝承を生み出した生活の座は明らかにし得ないとされている。⁽¹⁵⁾ いわゆる資料には含まれていない独立した伝承と考えられるので、アブラハム物語の中にこれが置かれたのは、最終編集の際であったとされる。一方、15章は明らかにJ、Eの2資料が組み合わされたものである。この資料に関する説明からすれば、15：1の「これらのことの後」を書いたのは、最終編集者ということになる。しかし、通常15：1はE資料のものとされる。このような資料に基づく説明は矛盾してはいないだろうか。

15：1をEとするためには、14章全体を、文脈に関係なく後からはめ込まれたもの、しかも、その際に何らの編集的加筆も行われていなかったと仮定しなければならない。これでは、最終「編集」という言葉に合致しない。しかも、14章を省くと、アブラハム（この時点ではアブラム）は土地の約束（13：14以下）の直後にもヤハウエから語りかけられていることになり、**אַחֲרֵי הַדְּבָרִים הָאֵלֶּה הָיָה דְּבַר יְהוָה אֶל-אַבְרָם**「これらのことの後、ヤハウエの言葉がアブラムにあった」という表現はおかしくなる。

また、22：1について見てみると、こちらの方は一連のEによるアブラハム

アブラハム物語の構造 1

物語（20：1～22：14の大部分）の中にあり、「編集句」と言うより、Eが物語を進める上で必要となった、話題転換のための装置と考える方が納得できる。

このように同じEに属していると考えられる一つのフレーズが、別の機能を待たされているとする事には、資料批判の内部では問題がある。⁽¹⁶⁾ そこには、別の説明の仕方が求められる。むしろ、話題を転換させるための装置という、文学的作用の面から説明することで、機能を一つのものとして示すことができる。

もう一つのフレーズ「行け」について見てみよう。12：1はJに属し、22：2はEに属するとされている。この分析結果は、特別の用語が特定の資料を示唆するという資料批判の原則に反している。⁽¹⁷⁾ そして、この特異な形を取る「行け」という命令に対し、不十分な履行と分離が、どちらの場合にも続いている。⁽¹⁸⁾ ここから、この「行け」というフレーズは、むしろ物語の中で、筋運びに関わる特定の要素として働いていると考えられる。「資料」よりも、むしろ文学的作用の「指標」だと考える方が分かりやすい。

これら2つのフレーズを総合して、文学的作用に関するものだと考えると、物語の「段落」の手がかりとなると考えられる。これらのフレーズを出てくる順に並べると、次のようになる。

12：1	לך-לך
15：1	אחר הדברים האלה
22：1	אחר הדברים האלה
22：2	לך-לך

12：1と22：2では新しい物語の筋運びが、この「行け」というフレーズによって導入される。15：1と22：1では、「これらのことの後」というフレーズによって話題が転換させられる。そして、22章では、この二つのフレーズが組み合わされている。つまり、「これらのことの後」を大きな「段落」の始まりと考えると、アブラハム物語は3つの部分に分けることができる。(1)12：1

～14：24、(2)15：1～21：34、(3)22：1～25：11。そして、(1)と(3)の部分は共に、「行け」のフレーズによって始まっているのである。その後も、先に見たように、不完全な履行と分離という同じ要素を共有している。

従って、これらのフレーズは、現在のテキストにおいて、大きな「段落」を読者に示す役割をもっていると判断してよいだろう。以下、この区分に従ってアブラハム物語の表層構造を見ていくことにする。

1. 2. 15：1～21：34⁽¹⁹⁾

上記のような区分の内、第2の部分から見てゆく。この部分には、アブラ(ハ)ムを始め、登場人物に子どもが産まれる記事が多く含まれる。アブラ(ハ)ムにはイシュマエル(16：15)、イサク(21：1～2)が生まれ、ロトにも二人の息子が生まれる(19：36～38)。アビメレクの宮廷にも、いったんは閉じられていた子宮が開かれ、子どもが生まれる(20：17～18)。

これらの誕生の内、イシュマエルを除くものは、イサクの誕生予告(18：9～10)とその実現(21：1～2)に挟まれた部分で起きている。そればかりでなく、同時期に起きた出来事として読まれるように構成され、さらに、3種類の誕生は比較されるようになっている。比較の目的は、イサクの誕生、その原因となった性的関係／交渉を正当化することにある。この小部分は、1つまとまりとして読むことが可能である。⁽²⁰⁾ 従って、この小部分を15：1～21：34を分析する際の手がかりとして、分析を始める。

(a) 「割礼」と「笑い」

イサク誕生の記事に続いて、「割礼」が施された記事が記される(21：3～5)。これに対応する記事は17：23～27にある。これらの記事に共通する事項は次のものが上げられる。

- ① 「割礼を施す」の主語はアブラハムである(17：23；21：4)。
- ② 割礼を施した時点の、アブラハムの年齢が記される(17：24；21：5)。
- ③ 割礼を施したのは、神の命令に従ってであるということが記される⁽²¹⁾

アブラハム物語の構造 I

(17 : 23 ; 21 : 4)。

これらのことから、中心部分のすぐ外側の枠として、「割礼」の記事が配されていると考えてよいだろう。

イシュマエルの割礼の記事の直前には、「笑い」を含む、アブラハムと神との対話が記されている(17 : 15～22)。この対話では、イシュマエルを推挙するアブラハム(18節。これは聞き入れられる、20節)に対して、神はイサクと契約を立てると宣言する(19、21節)。このイサクの名の元は、アブラハムの笑いである(17節)。笑いの原因は、年をとった自分自身やサラには子どもの生まれることなど不可能だという現実的な判断である(15～17節)。

この「笑い」の記事に対応する記事は21 : 6～13に見出される。アブラハムとサラに子どもが生まれるという事柄に対して「笑い」が関係している箇所がもう一つある(18 : 10～15)が、次に上げる共通項を持たないため、これは対応しているとは言えない。

- ① アブラハムやサラが主語となって、動詞 **ילד** が用いられる(17 : 17、19、21 ; 21 : 7)。しかし、18章では **לְשָׂרָה בֵּן** 「サラが男の子を持つ」という名詞文が主に用いられている(10、14節)。
- ② 「笑い」への言及が、イサク命名と関係付けられている(17 : 17、19 ; 21 : 3、6)。しかし18章では、サラの笑いは子どもの名とは関係なく、むしろヤハウエの怒りと結び付けられている(12、13節)。
- ③ アブラハムはイシュマエルを推挙する(17 : 18)のに対し、サラはイシュマエルを排除しようとする(21 : 10)。⁽²²⁾ 18章では、イサクかイシュマエルかという選択は問題となっていない。
- ④ アブラハムとサラの態度に答えて、エロヒームは、イシュマエルも「父」とすると約束する(17 : 20 ; 21 : 13)。同時にイサクの相続権も確認される(17 : 19、21 ; 21 : 12)。

ここから、「笑い」とは単にアブラハム、あるいはサラの「不信＝現実的判断」の現象ではなく、跡継ぎは誰であるかという問いをも含んでいると考える方がいいだろう。アブラハムは既にいた跡継ぎ(イシュマエル)以外に新しい、争

いの種となるかも知れない息子を望まなかったし、サラは自分の息子イサクを得たことで、相続を確かなものとして「笑う」のである。

従って、「割礼」の記事による枠の外側には、「笑い」による枠がつくられていると考えてよいだろう。図示すると次のようになる。

A 笑い 17:15~22

B 割礼 17:23~26

X 誕生 18:1~21:2

B' 割礼 21:3~5

A' 笑い 21:6~13

(b) ハガルの物語

(a)で分析した部分(17:15~21:8)の外側に、ハガルの物語が記されている(16:1~16;21:9~21⁽²³⁾)。このように、同種のエピソードが重複して記されている場合、それは異なる資料に由来するものだと説明されてきた(16章=J、21章=E)。⁽²⁴⁾

しかし、そのような単純な理解は、それぞれのエピソードがもっている細部を見逃してしまうことになるのではないか。まず、二つのエピソードの相違点に注目することから分析を始める。

- ① 16章でサライによって虐待されるのは妊娠中のハガイである(6節)が、21章ではハガルと(少なくとも)14歳になっていたイシュマエルを追い出すことがサラから命令される(10節)。
- ② 16章で逃亡はハガルの主体的判断による(6節)が、21章ではアブラハムが、サラの命令に従って、エロヒームの承認を受けて、ハガルとイシュマエルを追放する(14節)。
- ③ 16章でサライの反感を買ったのはハガルの態度であった(4節)が、21章でサラが見たものはイシュマエルの **קנצמ** であった(9節)。
- ④ 16章で「荒れ野」に至るまでヤハウエは介入しないが、21章ではエロヒー

アブラハム物語の構造 Ⅰ

ムがアブラハムの行動を容認している（13節）。

- ⑤ 16章ではエロヒームは偶然ハガルに出会う（7節）のだが、21章ではヤハウエは「声」を聞きつけて現れる（17節）。
- ⑥ 16章でエロヒームが聞いたのはハガルの「苦悩」であった（11節）が、21章ではヤハウエは「その子の声」を聞いている（17節）。
- ⑦ 16章でヤハウエはハガルに、サライのもとに帰るよう命じる（9節）が、21章ではエロヒームは、子どもを抱くよう命じるだけである（18節）。
- ⑧ 16章でハガルはヤハウエと井戸に名を付ける（13～14節）が、21章ではハガルは水を汲み、飲ませるだけである（19節）。
- ⑨ 出来事の後、16章でハガルはイシュマエルを出産する（15節）が、21章ではハガルはイシュマエルを結婚させる（21節）。

これらの相違点は、二つのエピソードが別の資料に属する、同じエピソードの異なる版であるという理解を困難にしているように思われる。むしろ、二つのエピソードは異なる文脈に置かれて、異なる作用をしていると考える方が、これらの相違点を説明できる（それぞれのエピソードの作用については、項を改めて論じる）。従って、「重複即ち別資料」という即断は避けた方がよいだろう。

では反対に、二つのエピソードに共通するものは何か。

第1に、エピソードの「あらすじ」が共通している。(1)ハガル（そして息子イシュマエル）のアブラハム家からの分離（16：6；21：14）、(2)荒れ野での神的存在との遭遇（16：7；21：17）、(3)子どもに関する約束（16：10～12；21：18）という筋立ては共通している。

第2に、動詞 **שמע** がどちらのエピソードにも共通して用いられている。そしてどちらのエピソードでも二つの用法が見られる。一つは、アブラ（ハ）ムがサラ（イ）の言うことを「聞く」場合（16：2；21：12）、もう一つはヤハウエまたはエロヒームがハガルまたはイシュマエルの声を「聞く」場合（16：11；21：17）である。それぞれのエピソードで、それぞれの用法が1回ずつ用いられている。

第3に、ハガルが神的な存在と遭遇する場所は、水に関係する場合である。どちらのエピソードでも、**כְּאֵר** という語が用いられている(16:14; 21:19)。

第4に、子どもに関する約束は、どちらのエピソードでも、アブラ(ハ)ムへの約束を繰り返していた(16:10「数え切れない」=15:5; 21:18「大いなる国民」=12:4、18:18)。

従って、(b)で見たキアスムスを狭む枠組みとして、ハガルについてのエピソードが与えられている。

(c) 契約

契約 **בְּרִית** という語が、15、17、21各章に用いられている。(15:18; 17:2、4、7、9、10、11、13、14、19、21; 21:27、32)。アブラハム物語中この他の箇所では、14:13に用いられるのみである。

15章と17章では、アブラ(ハ)ムとヤハウエ／エロヒームとの契約が主題となっている。この2章にはいくつかの共通点が認められる。

- ① 「契約」 **בְּרִית** という語が用いられている。ただし、15章では「契約を結ぶ」という表現 (**בְּרִית** + 動詞 **כָּרַח**) が用いられているのに対し、17章では契約を「立てる」(動詞 **קָם**) が用いられている。
- ② アブラ(ハ)ムの子孫が「数多くなる」という約束が与えられる(15:5; 17:2)。
- ③ カナンの土地を所有するという約束が与えられる(15:7、18; 17:8)。
ただし、15章では動詞 **יָרַשׁ**「相続する」が用いられている(3、4、7、8節)の対し、17章では「所有地」 **אֲחֻזָּה** という語が用いられている(8節)。
- ④ 土地に関して「寄留」(動詞 **גִּיר**) という表現が用いられている(15:13; 17:8)。

小さな相違点は、共通点と考えられるものの中にも、主に単語の使用に関して認められるが、最も大きな相違点は、それぞれの契約が、15章ではアブラハムと結ばれる(18節)のに対し、17章では、アブラハムから始まる子孫とも契約が立てられる(7節)ことにある。15章でも契約の内容が成就するのは「子孫」

アブラハム物語の構造 Ⅰ

に対してであるが、契約の相手はアブラムだけである。17章では、アブラハムも子孫も契約の相手とされている。

アビメレクとの契約も、上で見た15、17章の契約と同じ共通点をもっている（共通点の番号は上と同じにしてある）

- ① 「契約」**בְּרִית** という語が用いられている。ただし、15章と同じく「契約を結ぶ」という表現（**בְּרִית** + 動詞 **כָּרַח**）が用いられている（32節）。
- ④ 土地に関して「寄留」（動詞 **נָוַר**）という表現が用いられている（23、34節）。

さらに、アビメレクとの契約は15章との関連を示している。

- ① 契約に際し、動物が用いられている（15：9；21：28）。
- ② 契約が、この場合はアビメレクの「子孫」に関係するものとなっているが、契約の相手自体はアビメレクである（23、32節）。これは15章の契約内容に近い。ただし、15章では「子孫」は**זֶרַע** が用いられていたが、21章では **בְּנֵי** と **נָכַר** が用いられている。

これらのことから、アブラハム物語のこの部分（15～21章）の一番外側の枠として、契約に関する15章と21：22～34が置かれていると考えてよいだろう。そして、契約に関する章（17：1～14）がもう一つ挟み込まれることによって、契約の対象がアブラハム個人、あるいはその世代に止まらず、その子孫、具体的には次の世代にも引き継がれること強調されている。そして、次世代について契約を拡大することによって、先に見たように、イシュマエルかイサクかというテーマもそこには生まれてくることになった（「笑い」の部分）。

これら表層構造の分析から、アブラハム物語の中間部分は次のように構成されていると考えることができる。

- A 契約（15：1～21）
- B ハガルの物語（16：1～16）
- A' 契約（17：1～14）
- C 笑い（17：15～22）
- D 割礼（17：23～27）

X 誕生 (18 : 1 ~ 21 : 2)

D' 割礼 (21 : 3 ~ 5)

C' 笑い (21 : 6 ~ 13)

B' ハガルの物語 (21 : 9 ~ 21)

A" 契約 (21 : 22 ~ 34)

従って、「これらのことの後」を、先に前提としたように、大きな段落の指標として用いることが可能であることを示される。

次に、アブラハム物語の第 1 の部分を分析することとする。

(続く)

【注】

- (1) ここで、この両者には共通点と共に、相違点があることも指摘しておかなければならない。正典批評の場合、テキストの「有意味性」、つまり、会堂あるいは教会のテキストとしての理解が最も重要なものとなるのに対し、文芸批評の場合、テキストがどのように意味を生産しているかが重要となり、それが特定の集団に対して持つ意義は考慮されない。この点では、従来の歴史的・批判的方法は、正典批評と基本的な考え方を共有している。
- (2) アブラハム「物語」の範囲を決定することも本論文の目的の一つのであるが、ここでは便宜的に、アブラハムが登場人物として登場する部分を、一応の範囲としておく。
- (3) 殊にこの箇所には、いわゆる J、E、P という資料が明確に認められるとされている。
- (4) 例えば、J やその他の資料の年代・範囲については、今日、多くの研究者の間で意見の相違が見られる。
- (5) 再考されるべき範囲を最も広げれば、資料仮説も、テキストの前史全体もその中に含まれるだろう。
- (6) Rendsburg, Gary, A. *The Redaction of Genesis*. Winona Lake; Eisenbrauns, 1986. 他に、Garret, Duane. *Rethinking Genesis: The Sources and Authorship of the First Book of the Pentateuch*. Grand Rapids; Baker Book House, 1991. もあるが、これは、「構造」に関する限り、Rendsburg に完全に依拠しており、独自の構造を提示してはいない。
 勿論、注解書の緒論や目次には、創世記の「構造」という項目がある。しかし、殆どの場合、それは、「どのようなことが書いてあるか」という説明にすぎず、本論文がこの項で取り上げようとしている、表層構造ということに注目したものではない。
- (7) Rendsburg, *op. cit.*, p4.
- (8) *Ibid.*, p. 28.

- (9) *Ibid.*, pp. 28f.
- (10) その傍証として、この部分がユダヤ教シナゴグでの朗読区分と一致することを上げている。*Ibid.*, p. 51. しかし、自身でも指摘しているとおり、朗読区分と彼が提示する構造とは必ずしも一致しておらず、さらには、この区分もユダヤ教的解釈に基づいているため、「証拠」としては採用しにくいと考えられる。
- (11) 拙論「『アケーダー』の縛るもの—創世記22章の文学的作用」、『神学研究』（関西学院大学神学研究会）42号（1995年）、17ページ。
- (12) Rendsburg, *op. cit.*, p. 71.
- (13) *Ibid.*, p. 72.
- (14) *Ibid.*, p. 35.
- (15) 以下、資料分析については、次の書物を参考にした。
Driver, S. R. *An Introduction to the Literature of the Old Testament*, 9th edition. *International Theological Library*. Edinburgh: T. & T. Clark, 1913. 野本真也、「資料分析表（A）」、石田友雄他著『総説 旧約聖書』、日本基督教団出版局、1984年、214～15ページ。
- (16) これに対し、文芸批評では問題にならない。同じ言葉の機能を、意図的に変更して用いることで、特別な文学的作用が期待できると考えるからである。
- (17) 勿論、きわめて一般的な用語はこの「指標」から除外される。しかし、
לָקַח לְאִשְׁתּוֹ
は旧約中この2箇所にはしか見られない表現であるため、「一般的」とは言えず、「特別」の扱いを受けるべきである。
- (18) 拙論「『アケーダー』の縛るもの」、3ページ
- (19) この部分について、資料批判の成果をまとめておくと、以下のようになる。
J Eによる部分は括弧内に示してある。

P	16 : 1a、3、15-16	17章	19 : 29	21 : 1b、2b-5
E (15章)			20 : 1 - 17(18)	21 : 6 - 33(34)
J	16 : 1b-2、4-14	18 : 1 - 19 : 38		21 : 1a、2a

アブラハム物語の構造 I

- (20) 拙論「アブラハムの『義』をめぐって－創世記18～20章の文芸学的読み」、『神学研究』（関西学院大学神学研究会）41号（1994年）、18～19ページ。
- (21) ここで「命じる」を表す動詞は、17章で **צוה**、21章では **צוה** であるが、内容的には問題がないと考えられる。
- (22) イシュマエル排除をサラに決意させた理由について、ヒブル語本文は明確な答を与えていない。9節に、「サラは、エジプト人女性ハガルの息子、〔ハガルが〕アブラハムとの間に生んだ子が、からかっている（**צחק**、ピエル語幹）のを見た」と記されている。動詞 **צחק** がピエル語幹で用いられているために、目的語が欠けていると判断したのだろう、LXXは「自分（サラ）の息子イサクを」をつけ加えている。新共同訳やNRSVもLXXに従って本文を読み変えている。
- (23) 9～13節は、この直前の「笑い」の中にも含まれると考えられる（前述参照）。しかし、ハガルとイシュマエルを追い出すようにというサラの命令は、この後のエピソードには不可欠の部分である。従って9～13節は、両方の部分に含まれると考えるのがよいだろう。
- (24) 「危険にさらされる族長夫人」（12：10～13：1、J；20：1～18、E）のエピソードが重複しているのも、同様に説明される。しかしこの場合、20章には「子宮を開く」という記述を置き、そのことによってサラの子宮も「開かれ」てイサクを生むことが可能になったことを記すという機能が与えられていた。12章には、後述するように別の機能が与えられており、単に資料の異なる重複とは言えない。